

令和3年度 江別市大学連携調査研究事業 報告書

小・中学校と連携した、児童生徒の学びの連続性に関する研究

令和4年 3月31日

北翔大学 教育文化学部教育学科  
江別の学びの連続性に関する研究グループ  
(横山光、西出勉、三浦公裕、二宮孝行、石塚誠之、杉浦勉)

## 目 次

1. 研究事業の概要	2
1-1 研究事業の背景	
1-2 研究事業の目的	
1-3 研究事業の経過	
2. 研究事業報告	
2-1 江別市小・中学校一貫教育フォーラムの開催【概要】	3
(1) 日 時	
(2) 場 所	
(3) 目 的	
(4) 参加対象	
(5) 申込者数	
(6) 日程	
(7) 内容	
2-2 江別市小・中学校一貫教育フォーラムのまとめ・分科会からの提言	5
(1) 全体会・基調講演	
(2) 分科会のまとめ・提言	
(3) 参加者アンケート結果	
2-3 小学校における GIGA スクール端末利用の現状視察と学生による提案	19
3. 研究事業のまとめ・提言	22
4. 資料	23
4-1 江別市小・中一貫教育推進フォーラム案内文書（表面）	
4-2 江別市小・中一貫教育推進フォーラム案内文書（裏面）	
4-3 江別市小・中一貫教育推進フォーラム全体会使用スライド	
4-4 江別市小・中一貫教育推進フォーラム基調講演スライド	
4-5 江別市小・中一貫教育推進フォーラム運営マニュアル	
4-6 江別市小・中一貫教育推進フォーラム文字起こし記録	別冊

## 1. 研究事業の概要

### 1-1 研究事業の背景

江別市では、令和4年度から令和5年度にかけて市内全校区において小中一貫教育を導入する。しかし、令和4年度にモデル校として先行導入する第二中学校区が唯一の小中同一校区であり、その他は複数の小学校から中学校へ進学したり、複数の中学校に進学する小学校があったりしており、小中学校の学習及び生活指導方針等の連携には未だ課題が残されている。市内全域で本格的に小中一貫教育を導入するために、モデル校の実践を客観的に分析する必要がある。

### 1-2 研究事業の目的

義務教育9年間の学びの連続性を高め、様々な学校教育現場の問題を解決することが求められている。そこで、全国で実施されている小中一貫教育の事例を調査するとともに、江別市の小・中学校の現状と課題を踏まえた「望ましい学びの連続性」について研究する。

研究ではモデル校である江別第二小学校、江別第二中学校での課題抽出や実践検証を行う。また他市町や、他県における先行地域の優良事例等を市内教員に還元する研究フォーラムなどを開催し、協議を行う。これらの研究・普及活動を通して、望ましい小中一貫教育のあり方について提言を行い、江別市の小・中学校における「学びの連続性」形成に寄与する。

### 1-3 研究事業・関連事業の経過

※研究事業はゴシック表記

6月10日 文京台小学校 ICT活用授業視察

6月24日 江別第二小学校 ICT活用授業視察

7月15日 江別第二小学校、第二中学校ヒアリング

7月27日 学生によるGIGA端末活用事例提案（文京台小学校、江別第二小学校）

10月29日 江別市教育委員会との打ち合わせ

12月12日 小中一貫教育全国サミット（オンライン・北広島市）参加

12月3日 江別市小・中学校一貫教育推進フォーラム（一次案内）発送

12月20日 江別市小・中学校一貫教育推進フォーラム（二次案内）発送

1月11日 江別市小・中学校一貫教育推進フォーラム

## 2. 研究事業報告

### 2-1 江別市小・中学校一貫教育フォーラムの開催【概要】

- (1) 日 時 令和4年1月11日(火) 13:30～16:00
- (2) 場 所 Zoomによるオンライン開催
- (3) 目 的 全国的に推進が行われている「小中一貫教育」に関心のある皆さま（教職員、保護者、教員を目指す学生、市民の皆様）の理解を深めるとともに、江別市において令和4年度から本格的に導入を始める「小中一貫教育」のあり方について、多様な立場の参加者から生の声を集めることで疑問や課題を共有し、地域の未来を担う子ども達への教育の充実に資する。
- (4) 参加対象 小中一貫教育に関心のある教職員及び保護者、一般市民の皆様、大学生
- (5) 申込者数 合計89名（小中教員49、保護者9、大学生16、大学教員9、一般6）
- (6) 日 程

13:00 30		14:00 00		30 40		15:00 20 30		16:00 50
接続	開会	全体会①	基調講演	休憩・接続変更	分科会	休憩・接続変更	全体会② 分科会報告 総括	閉会

#### (7) 内 容

全体会① 小中一貫教育の意義・フォーラムのねらい説明（北翔大）

基調講演 「学びの連続性を大切にした小中一貫教育のあり方（仮題）」

京都市教育委員会主席指導主事 吉川康浩 氏

分科会 ・一貫教育を推進するための環境整備（担当：北翔大学教授 西出 勉）

・教科指導における一貫教育（担当：北翔大学講師 杉浦 勉）

・生活指導における一貫教育（担当：北翔大学教授 三浦公裕）

・児童・生徒理解における一貫教育（担当：北翔大学准教授 石塚誠之）

・ICT活用における一貫教育（担当：北翔大学准教授 二宮孝行）

・保護者の協力する一貫教育（担当：北翔大学教授 横山 光）

全体会② 分科会の報告

総括（議論のまとめと、今後の江別市小中一貫教育の課題洗い出し）

## 2-2 江別市小・中学校一貫教育フォーラムのまとめ・提言

### (1) 全体会・基調講演

全体会では、最初にフォーラムのねらいを説明し、続いて江別市で進めようとしている小中一貫教育の目的やスケジュールについて説明を行った。その後、京都市教育委員会主席指導主事の吉川康浩氏から『9年間の「学び」と「育ち」をつなぐ小中一貫教育』と題して、京都市がこれまで進めてきた小中一貫教育について基調講演があった。

基調講演では、「つなぐ」をキーワードとし、平成23年から始まった小中一貫教育の取り組みが、現在は義務教育学校8校を中心として、9年間の学びと育ちの責任を学校だけでなく、地域も責任を持ってつないでいくという部分に力を入れて進めていることや、小・中学校のブロック内での合同研修を行っていること、9年間を見通した各科目の教育課程など、江別市にとって参考になる事例が紹介された。江別市にとって重要なのは、施設分離型（京都では連携型と呼んでいる）の進め方として、ブロックで一つの学校という意識改革をすすめる合同研修の充実や、予算的な支援と人員の配慮などを市が率先して取り組んでいる点などが紹介された。学校運営協議会やコミュニティ・スクールも小中合同で設置しているところが多く、64校中45校あることも参考になる情報であった。

講演後の質疑では、業務負担をどのように解消してきたのか、行事等の合同運営はあるのか、小中合同の児童生徒理解のための情報交換の工夫などについて質問があった。それに対し、京都市では予算や人的配慮をはじめとした教員の負担軽減の工夫を行い、学期に数回の小中ブロックでの情報交換などを行い、教員同士の一体感を高めてきたことなどが回答された。



図1 フォーラムにおける Zoom 画面  
上：代表者挨拶  
下：基調講演の吉川康浩氏

## (2) 分科会のまとめ・提言

### 【分科会① 「一貫教育を推進するための環境整備」】

運営者 西出勉（北翔大教員）

#### 1) 分科会設置目的

江別市における「小中一貫教育」の推進に向けた環境整備等について、札幌市の「小中一貫した教育」について学ぶとともに、分科会の協議内容を踏まえ、令和4年度からの江別市の取組について推進上の留意点等を提案する

#### 2) 分科会で得た知見・成果

##### (ア) 札幌市の「小中一貫した教育」から学ぶ

###### □ 札幌市における「小中一貫した教育」

小・中学校の教職員が、互いの教育課程や日常の学習指導、生徒指導等を相互に理解し合うことで、9年間の系統性・連続性のある教育を実現し、子どもの知・徳・体の調和のとれた育ちの一層の充実を図ることを重視する。

###### 【目的】

「自立した札幌人」の実現に向け、義務教育段階において「知・徳・体の調和のとれた育ち」の一層の充実を図る。

###### <推進の4つの視点>

- ① 9年間を通した子どもの学びのつながり
- ② 子ども理解・生徒指導の連続性
- ③ 教職員の連携・協働 ～ 顔の見える関係・意見の交わせる関係づくり
- ④ 家庭や地域との関わり

###### □ 「小中一貫した教育」の推進体制

- ◇ 97中学校区を基本単位とした「パートナー校」を編成し、「知・徳・体の調和のとれた育ち」の一層の充実を図ることを目的として、各パートナー校で創意工夫しながら取り組むように体制づくりを行っている。
- ◇ パートナー校による推進体制の構築により、授業交流や合同研修会の実施など中学校（中学校区）に焦点化した取組が可能になるというメリットがある。
- ◇ 教職員の協働体制の確立については、「リーダーシップを発揮する校長」「連絡・調整と進捗状況の把握を行う教頭」「教職員同士の情報共有を広げていく実務担当者」など、役割分担を明確にし、取り組んでいくことが重要である。

◇ パートナー校でのP D C Aサイクルを意識した評価・検証の取組が必要である。具体的には学校評価における自己評価や学校関係者評価委員会の活用等が考えられる。そのためには、学校経営や教育目標の具現化の視点から「グランドデザイン」の作成や「子ども像の設定」など校長のビジョンを教職員と共有しながら意識を高めていくことが必要である。

(イ) 「継続できるシステムづくり」 に向けて

- ① 中学校区における「共通の課題」や具体的に実践（実行）する内容を明確にする。
- ② 教頭や教務担当教員が中心となって、教職員間をつなぐ「ネットワークづくり」を意識する。
- ③ 「見通し」と「振り返り」を重視し、P D C Aサイクルを意識した評価・検証と具体的な改善方策を考える。

### 3) 江別市の小中学校への提言

第1分科会の協議を通して、主に以下のような視点が重要であると考えられる。

(ア) 江別市全体や各中学校区における「一貫教育」の推進に当たっては、教職員間で基本的な理念や目的（目標）の共通理解を図っていくことが必要である。その際には特に、「9年間を見通した系統性・連続性」を常に意識し取り組んでいくことが重要である。

(イ) 「小中一貫教育」の目的・目標を踏まえ、江別市における「小中一貫教育」の具体的なビジョンを明確にしていくことが求められる。その際には、「目指す子ども像」の具体化やビジョンの全体像を明示したグランドデザインの作成など、中学校区の教職員が「何をどのように実践していくのか」が具体的にイメージできる取組が必要である。

(ウ) 中学校区における教職員の協働体制の構築に向けては、「リーダーシップを発揮する校長」「連絡・調整と進捗状況の把握を行う教頭」「教職員同士の情報共有を広げていく実務担当者」など、教職員の役割分担を明確にしながら取り組んでいくことが大切である。

(エ) 中学校区の小・中学校が一貫教育を推進するためには、その推進の手順を共有化し取り組むことが大切である。具体的には、P D C Aのマネジメント・サイクルを意識し、「①課題の洗い出し」「②重点目標・活動の設定」「③評価・改善の計画」「④実践の計画・実施」「⑤評価・改善」のステップを経た段階的な取組が大切である。

(オ) 「小中一貫教育」の実践に関する評価・検証については、学校評価における自己評価の活用や中学校区における小・中学校による合同の学校関係者評価の実施など、学校と家庭（保護者）、地域社会（地域住民）が連携・協働しながら実施していくことが大切である。

その際には、できるだけ評価指標（取組指標や成果指標等）を具体的に設定し、検証していくことが、継続的な検証・改善につながっていくものとする。

## 【分科会② 「教科指導における一貫教育」】

運営者 杉浦勉（北翔大教員）

### 1) 分科会設置目的

小学校と中学校が一貫した教育を進めていく上で、教科指導は柱となるものだと考える。その教科指導に関して、小学校と中学校に「指導のズレ」や「教え方の違い」が生まれるのは当然のことだろう。本分科会では、教科指導における「小中ギャップ」の解消を目指し、小中一貫した教科指導の方向性を提案することを目的とした。

### 2) 分科会で得た知見・成果

一貫した教科指導のポイントとして「教科指導の基盤」と「授業交流」の二つをあげる。

#### ○「教科指導の基盤」

教科指導のポイント①として、「教科指導の基盤」があげられる。これは、北海道教育委員会が進める「学校力向上総合実践事業」でも取り上げられている「学習規律の統一」に関する内容である。一方で、「学習規律の統一」という表現になることで、子どもたちに強制といった、いわゆる“縛り”を与えてしまうという危惧がある。そこで、「学習の規律」という表現を使用するのではなく、「学習のめやす」という表現を使用し、教科指導の基盤を図っていくことが求められる。

フィランドによる教育に関して、小中の9年間の区分けが地区によって異なるという示唆をもとに、「学習のめやす」を作成する上で、どのような区分けにするのかということも重要である。

また、各学校で既に行なっている「学習のスタンダード」としての取組があれば、そういった取組を連携校で共有し、それぞれを尊重しながら、統一させていくところなどの方向性を決定していくことの重要性も明らかとなった。

#### ○「授業交流」

教科指導のポイント②として、「授業交流」があげられる。小学校と中学校が一貫した教科指導を行う上で、生じてしまう「指導のズレ」や「教え方の違い」といった課題を解決するものである。ここでは、連携校同士で「授業を見せ合う」ことが重要になる。

「授業を見せ合う」ことで、まずは、それぞれの「学習スタイルの違い」が明らかになる。次に、それぞれの「学習スタイル」や指導の仕方に関する違いについて、意図や思いを交流し共感していくことで、それぞれの指導のよさや効果について共有することができる。また、9年間のゴールの姿を明らかにし、小学校と中学校で身に付けるべき力の育成を図っていくことが求められる。

### 3) 江別市の小中学校への提言

- ①学習規律の統一に関しては、縛りにはせずに、あくまでも「めやす」という表現の方が望ましい。
- ②小学校から中学校に変わる場合や学級担任が変わる場合も含め、子どもたちが新しい学び方を身に付けるという考え方よりも、学校や学級担任が変わっても基本的な学び方に変化はなく、子どもたちが安心して学習することができる環境づくりを行うことが望ましい。
- ③区分けについては、各学校の方針や意図を尊重するが、教科指導の一貫教育という視点で、小学校第5学年と第6学年、中学校第1学年は同じ区分になるとよいと考える。
- ④「学習のめやす」を作成する上で、学校の取組を共有し、それを尊重しながら着地点を定める。
- ⑤作成した「学習のめやす」に関しては、小中で一貫するまでに時間がかかるものであるため、重点を決めて少しずつ取り組むというイメージで進めることが望ましい。
- ⑥多忙な業務の中で、一貫した教育を効果的に進めるために、「学習のめやす」に関する時間よりも「授業改善」に集中した時間を設定していくことが望ましい。
- ⑦授業交流し、学習スタイルの違いを理解するだけでなく、その指導の意図や思いを伝え合い共感することが重要である。
- ⑧9年間のゴールを明らかにし、小学校と中学校で子どもたちが身に付けるべき力を指導者が明確に押さえることが大切である。
- ⑨小学校と中学校の指導に関するエッセンスを効果的に取り入れ、できるところから少しずつ授業改善を図っていくことが望ましい。

## 【分科会③ 「生活指導における一貫教育」】

運営者 三浦公裕（北翔大教員）

### 1) 分科会設置目的

本分科会では「子どもたちの夢をかなえる“中学進学”を！」をテーマに設定した。小学校を卒業し、中学校に進学した後に顕在化する不登校やいじめ、暴力行為等の問題行動等の兆しは小学校高学年で生じているケースが多く、小中学校間の接続の円滑化や教育活動の充実が求められている。期待と不安でむかえる中学校への進学について、小学校と中学校の教職員がひとつの“チーム”になることで、何ができるのか？ 本テーマを通して、すべての子どもたちが中学校生活に夢を抱くことができることを願い、一緒に考えた。

### 2) 分科会で得た知見・成果

分科会に参加された先生から、自校の小中一貫教育における状況をうかがい、現在取り組んでいることや課題となる点について意見交流を行った。以下のように、現在取り組んでいる内容などについて紹介された。

- ・施設隣接型として、すでにモデル校として小中一貫教育を推進されている江別第二中学校と江別第二小学校では、様々な面で先行していることが多く、今後の一貫教育における貴重な示唆を得た。
- ・小中合同会議を開催し分科会ごとに分かれ情報交流等を行うなど、小学校と中学校の連携の進めやすさを実感されていた。
- ・2校では「めざす子ども像」を設定し、実践活動のスローガンを設定していた。
- ・小中一貫教育に関して、担当されている先生が連携され精力的に推進している一方で、まだ全体の取り組みとなっていないところが課題としてあげられていた。
- ・中学校における学習や生活に関するガイドブック（江別市内の中学校では「スタンダード」）を小中学校が共同で作成し、毎年その内容を見直しリニューアルを行っていた。
- ・施設分離型として、中央中校区の3校（中央中学校・中央小学校・対雁小学校）では、保護者や学校運営委員の方にアンケートを実施し、「めざす子ども像」について検討していた。
- ・様々な事情を抱えている児童に対しては、入学前相談などを実施することで不安が解消され、そのメンバーとしてスクールカウンセラーなどが効果的であることが紹介された。

### 3) 江別市の小中学校への提言

施設隣接型では、連携しやすい環境であることを生かしながら、一貫教育の取り組みが先行している様子がうかがわれた。これまで江別第二中学校、第二小学校が取り組んできた様々な実績が、施設分離型で一貫教育を進めていく小中学校に提言されていくことが期待される。また、施設分離型では小学校と中学校の連携だけではなく、小学校・中学校同士が合同で協議する場を設けて、互いのよさを共有することも可能であるとする。

全国的なデータから、中学生になることに「不安」を感じている小学校6年生の親子は、7割を超えているという報告もある（ベネッセ教育情報サイト，2021）。小学生が不安を感じることで学習・友人関係・校則問題や部活動など多岐にわたっている。そうした中で、小学校と中学校が合同で中学校生活ガイドブック（スタンダード等）を作成し、より児童生徒の実態に即したものを目指し毎年見直しを行っていることは、とても価値ある実践である。中学校に進学する前に、中学校の学習や生活について理解することは児童や保護者にとって、進学不安を解消する大きな安心材料となるものとする。先進的な取り組みとして、岡山県が行っている「中学校生活をスムーズに始めるためのプログラム」は大変参考になる（岡山県総合教育センター，2014）。

最後に、小中一貫教育について、全市的に推進していこうとする意識の高さを強く感じた一方で、日々の教育実践の忙しさのなか、教職員への取り組みとして発展し難い面もあることもわかった。すべての教職員が同じ意識をもって小中一貫教育の役割を担えられるよう小中交流会など（含む分科会）を定期的に行い、つながりを深めることが大切ではないかと感じた。そして交流会などには、ぜひ大学もメンバーの一員として仲間に入れていただき、一緒に江別市の小中一貫教育について議論させていただければと強く願う。

#### 【分科会④ 「児童・生徒理解における一貫教育」】

運営者 石塚誠之（北翔大教員）

##### 1) 分科会設置目的

障がいの有無に関わらず、皆が支援し、支援され、ともに成長できる社会を実現することを最終的な目標と考え、本分科会では、児童・生徒の成長を促進する幼小連携・小中連携など移行支援に関わる児童・生徒理解のあり方について考えた。すでに、札幌市の「サポートファイルさっぽろ」、士幌町の「ほろっと」などを活用した移行支援、小中合同生徒指導研修会、小中特別支援学級の合同イベントなど様々な活動が始まっている。それらの事例を通して、児童生徒を中心とした効果的な児童理解のあり方について考えた。児童生徒の支援・配慮に関わる情報をどのように引き継ぎ、子どもたちの支援をつなげること

ができるのか、札幌市の「サポートファイルさっぽろ」活用の意義、士幌町の育ちと学びのサポートファイル「ほろっと」の活用における認定こども園、小学校、中学校、高校に行ったアンケート結果などをもとに考えを深めた。

## 2) 分科会で得た知見・成果

分科会では、士幌町発達相談センターの大友輝洋先生から、士幌町の育ちと学びのサポートファイル「ほろっと」を活用した事例や、発達相談センター職員として、移行支援における児童生徒理解をどのようにスムーズに行う必要があるのか実際の事例について伺った。以下のように、現在取り組んでいる内容などについて紹介された。

- ・発達障害のある児童・生徒の中には、衝動行動・他害など目立つ症状がなく、学級等で放置されがちであるが、幼少児期の早期発見・早期治療が重要であることを確認した。
- ・ライフステージに応じた福祉支援・教育などの重要性について共有した。
- ・通常学級に特別な支援を必要とする、行動面もしくは学習面に問題を抱える児童生徒が6.5%と言われており、支援員やそれに準じた教員補助者、介助員、学習支援員は、地域によって様々だが、通常学級をサポートする効果的な体制づくりが課題として挙げられていることを共有した。
- ・行動や発達において不安や心配な面のあるお子さんを支援するということを目的とし、情報を1つにまとめることで、保護者と関係機関（保健・福祉・保育・教育・医療など）が、よりつながりやすくするためのツールとして作成された「ほろっと」の活用事例について紹介された。
- ・進学時の注意点として、学習環境・人間関係が大きく変わるため、発達障害を抱える児童生徒は適合が困難になり二次障害につながる可能性があることが示唆された。
- ・個別支援計画の作成に際し、引き継ぎのためのサマリーシートが準備され、新しい生活、環境にできるだけ円滑に移行することができるよう、これまでの様子をまとめ、要約し活用することの意義が大きい。また、その際、引き継ぎ後の配慮点について記載することが特に推奨されている。
- ・個別の指導計画の活用について、対象となる児童生徒の苦手なところに焦点を当てるのではなく、良いところや良い姿、本人の得意なことをさらに伸ばしていくことができるような支援方法を見出し、計画に入れていくことの重要性が紹介された。

## 3) 江別市の小中学校への提言

発達相談センターに通所している児童・生徒について、発達相談センターが児童・生徒の移行支援についてどのような役割を担うことができるのか、また関わることができるのか明らかになった。士幌町では、関係機関が連携しやすい環境であることを生かしながら、一貫教育の取り組みが行われている様子がうかがわれる。様々な調査も同時に実施しているため、それらの実績が、施設分離型で一貫教育を進めている江別市の小中学校に提言されていくことが期待される。また、生徒指導研修会などでは小学校と中学校の連携だけではなく、小学校・中学校同士が合同で協議する場を設けて、互いのよさを共有することも可能であるとする。これまでの全国的なデータから、発達障害の疑われる児童・生徒が学齢児の約6.5%に上ると報告されている。また、その中で、不登校や適応の問題など困難さが生じ、二次障害につながるという報告もある。小学生が不安を感じることで学習・友人関係・校則問題や部活動など多岐にわたっている。そうした中で、発達障害のある児童に限らず、移行支援にニーズのある児童生徒について、小学校と中学校が合同で入学時の移行相談の機会を設けることや、生徒指導上の問題を共有する小中合同の生徒指導研修会を企画し、移行支援を進めることは重要である。また、児童生徒理解を促進するため効果的な実践事例について知ることの意義は大きい。中学校に進学する前に、中学校の学習や生活について理解することは児童や保護者にとって、進学不安を解消する大きな安心材料となる。また、小学校から中学校に進学した後、どのように成長し、どのような力を小学校でつけておくことが必要であるのか知りたいという話題が小中合同の生徒指導研修会で出ており、今後、小中の学び合いにさらに焦点が当たると考えられる。

最後に、小中一貫教育について、推進していこうとする意識の高さを強く感じた一方で、日々の教育実践で教員に課される役割が増えていることを強く感じる。それらの負担を軽減するために必要な取り組みの一つとなりうる児童生徒理解の推進が、児童生徒の将来的な自立や大きな成長につながる可能性を持ち合わせているという理解を広げながら、小中一貫教育の役割を担えられるよう小中交流会や効果的な実践の紹介などを進め、更なる学びにつなげていきたいと考える。

#### 【分科会⑤ 「ICT活用における一貫教育」】

運営者 二宮孝之（北翔大教員）

##### 1) 分科会設置目的

GIGA スクール構想が前倒しで進められ、既に小中学校にタブレット端末が配布され活用されている。

本分科会では小中一貫で ICT の活用するためにどのような方法があるのか、活用例を小学校児童と中学校の生徒、小学校教員と中学校教員、保護者と小中学校教員の関係を意識して示すことが目的である。

## 2) 分科会で得た知見・成果

### ①児童生徒のつながりを意識

静岡県、美和・阿部口・足久保小と美和中学校の取組例として、授業における交流場面の紹介があった。また、小6と中1以外の交流でのタブレット端末活用例も紹介された。これらの事例では、ICTの活用によって児童生徒のつながりをそれぞれが意識できたことが重要な成果として共有できた。

### ②小学校教員と中学校教員

どのようなアプリがインストールされどの教科で活用しているかなど、お互いの校種のタブレットを確認することの重要性が確認された。

また、生徒指導対応における小中での情報共有なども ICT を活用することで促進できることも提言された。

### ③保護者と小中教員

学校便り、学年・学級便りのペーパーレス化を進めることができる。

また、家庭学習での使用事例として、良い取組の情報共有ができた。

### ④羅臼町立知床未来中学校の取組

ICT 環境について、町を上げて力を入れており、小中一貫校での具体的な活用方法を示すことができた。

## 3) 江別市の小中学校への提言

① 児童生徒のタブレットは持ち帰り可能にする。(1日の学びを振り返るために、また家庭学習での活用として) 函館市、室蘭市、知床町は取組済(実は札幌市も学校ごとに柔軟に取り組んでいる)。

② 校内、家庭における通信環境の整備(整っていない家庭に市の予算でポケットWiFi貸与などの方策をすすめる)。

③ 校務用、教室用 PC タブレットの統一(1台の端末にして無線回線を校務用と教室用に分けることで可能となる)。教員の使用 PC が 2 台あることによる業務の停滞、使用の抵抗感を減らす必要がある。

## 【分科会⑥ 「保護者の協力する一貫教育」】

運営者 横山光（北翔大教員）

### 1) 分科会設置目的

本分科会は「小中学校の9年間を通して、子ども達の成長を温かくサポートしたい！」という思いを大切にする教員・保護者の意見交換を目的に設定した。

義務教育9年間を通して子供達の成長を見守るための色々な立場の方が、それぞれの立場でできることを考えることや、小中それぞれのコミュニティスクールやPTAがどう連携していくか、北広島の西部地区での実践を紹介していただき、江別市や江別市外で一貫教育にCSやPTAが関わる第一歩となるヒントを見つけることを目的とした。

### 2) 分科会で得た知見・成果

北広島の西部地区ではCSと一緒に関わって小中一緒にCSの行事や学校の行事にもCSが関わっているということが印象的であった。たとえば小中合同の防災訓練を地域とともに実施し、その中で小中学生がともに学ぶ場面を設定するなどをしている。これにより、地域の小学生中学生のつながりが感じられたり、地域の方々が学校の運営や子供達に関心を持ち地域の一員であるというように意識の向上を感じたり、地域・学校・家庭が一体となって見守ることで、安心安全に学校生活を送ることができたり、小中一貫でさまざまなことに取り組むことでより良い交流が生まれているなどの効果も報告された。学校の授業にも地域の人員が日常的にサポートで入るなど、地域の住民が学校教育に積極的に参加することが小中一貫教育を支えていることが実感させられた。京都市の吉川先生からも、「PTAもCSも学校運営委員会も最後は一つに」とすることをぜひ目指して欲しいというご助言をいただいた。CSを積極的に取り入れていくことで良いことがたくさんあり、仕事改革にもつながるので、はじめは億劫かもしれないが是非取り組むと良いという西部地区の管理職からの助言もあった。また、新しい取り組みはとにかく心のハードルも大きいし、業務の負担感が大きいので、「無理をせずできることから始めよう」というキーワードをもとに進めてきた結果であるというありがたい言葉をいただけた。

### 3) 江別市の小中学校への提言

本分科会は、江別市内の教職員及び保護者による不安や疑問点の交流を主たる目的としていたが、実際には先行事例を紹介していただいた北広島市西部地区の教職員及び保護者

の参加が中心となった。このことは、江別市内の教職員の「保護者参画」に対する意識や必要性が低いためのものか、それ以上に他のテーマに関する不安や関心が高かったからなのかを検証する必要がある。何よりも、先行事例紹介を依頼した北広島市西部地区から、小中学校双方の教員、保護者、地域住民が一緒に参加するという一体感を見せてくれたことが、先行都市と江別市との違いを物語っている。

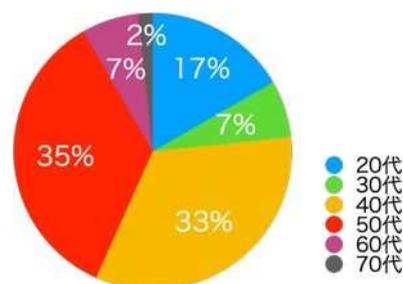
地域住民が率先して学校運営に参加している姿は、江別市の小中一貫教育を進める上で見習うべき見本であり、PTA、江別型コミスク、学校運営委員会などに加え、小中一貫教育という新たな仕組みを学校に導入していく時に、多忙感だけが増えることになっていないか根本から見直す必要がある。分科会の中で吉川氏から助言があったように「PTAもCSも学校運営委員会も最後は一つに」という点を真剣に受け止めるべきである。京都市はCSを1年前に廃止し、小中一貫教育に主軸をおいている。このような思い切った教育政策も必要である。

#### (11) 参加者アンケート結果

参加者のアンケート結果とを以下にまとめる。

##### ① 参加者の年齢層 (図2)

フォーラムには、図2のように20代から70代まで幅広く参加した。しかし、20代のほとんどが大学生であり、現職教員での参加は10人中1名であった。また、30代では現職教員での参加は4名中2名であり、若い世代の教員における、本フォーラムへの関心の低さが伺える。



一方、40代、50代の参加者には主幹教員や管理職も多く、図2 参加者の年齢層  
学校を運営する立場の教員にとって関心の高い内容であったと考えることもできる。

##### ② 小中学校教員の所属

参加者のうち、小・中学校に勤務する教員の内訳を次にまとめる。

---

小学校教員	26名 (市内11校から24名のうち第二小から9名、市外から2名)
中学校教員	11名 (市内7校から8名のうち第二中から3名、市外から3名)

---

以上から、小学校教員の方が、中学校教員よりも関心を持っていることがわかる。さらに令和4年度から小中一貫教育が導入される、江別第二小学校、江別第二中学校からの参加が多く、自分事として本フォーラムのテーマを受け止めていると考えられる。

### ③ 参加分科会の種別 (図3)

本フォーラムでは6つの分科会を設定したが、それぞれの分科会参加者は図3のように第1分科会と第2分科会に集中した。第3分科会は6名中4名、第4分科会は8名中4名、第5分科会は6名中4名、第6分科会は7名中1名が江別市内の小中学校教員の参加者数であり、一貫教育を始めるにあたり、課題意識がどこに向いているのかがわかる。



図3 分科会の参加者数

### ④ 小・中学校の一貫教育を進めるにあたっての課題

小・中学校の教員 (小26、中11) の記述は、目標・教育課程、教員の意識向上・体制づくり、学校間・地域・家庭との連携、業務負担・時間確保、に関する課題に分類することができた。それぞれの課題に関する記述はさらに分類し、所属する学校種別に色分けして、記述数を表したものを図4に記す。

目標・教育課程に関する課題は19の記述があったが、9年間を見通したカリキュラムや15歳での子ども像の明確化については、中学校教員の問題意識が非常に高いことがわかる(6/11人)。

教員の意識向上・体制づくりに関する課題の記述数は最も多く、小中一貫教育を進めていく上での体制が未整備

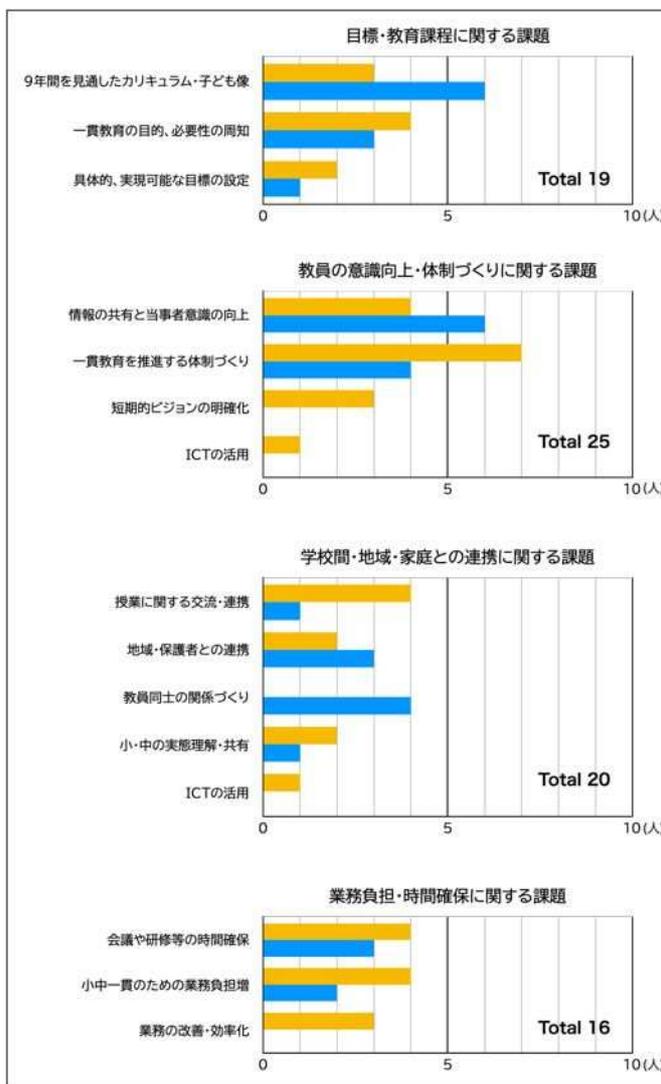


図4 一貫教育を進める上での課題と記述数 小 ■ 中 ■

であることが反映されている。また、教員の意識改革についての記述や、人的補充などの要望もあった。このことから、現状では特定の担当者だけに負担が偏っていることが予想される。

学校間・地域・家庭との連携については、小・中学校での意識の差が大きい。小学校教員は授業に関する交流や連携を求めているとされており、より専門的な教科運営をしている中学校から情報をもらいたいということではないか。一方、中学校教員は教員同士の関係づくりを求めているとされており、日常的に教科担任制をとっているために、関係づくりの重要性を理解して求めていると考えられる。

業務負担・時間確保に関する課題については、小中教員ともに会議や研修の必要性と時間の確保を訴えており、ついで一貫教育推進による業務負担増に対する課題意識を持っている。業務の改善・効率化に関する記述が小学校のみなのは、教科担任制で分業が徹底されている中学校に比べ、小学校教員のほうが負担感を抱いているのかもしれない。

全体を通した結果として、体制づくりと連携の2つの項目において、ICTの活用が求められているところは特筆できる。本フォーラムでもICTを活用した連携事例が紹介されていたが、施設分離可型の小中一貫教育だからこそ、ICTを活用した授業交流や情報交換ができると良い。

最後に、図4には反映していないが、その他の意見として、生徒指導と教科指導の連携の両立や、中1ギャップに関する記述が1件ずつあった。

⑤ 小・中学校の一貫教育を進めるに

あたっての疑問や不安

表1のように、疑問点や不安について記入してもらったが、その半数ほどが業務の多忙化に関する心配であった(赤字)。また、特別支援学級の児童の一貫教育はどうかや、その他配慮が必要な児童・生徒・保護者へのサポートをどのように進めていくのか、さらに、教員の配置増を求める記述など、具体的な点での疑問や要望も寄せられた。

表1 疑問点や不安なこと (赤字は業務多忙化に関する記述)

学校の独自性や地域性を担保することと、複数校で足並みをそろえることのバランス。
学校全体で同じ価値観をもって進めていけるか
業務多忙の中、計画が頓挫してしまうなど不安がある。
子どもたちにとって良いことはほとんどやってくるべきだと思います。ただ先生方の働き方改革も見据えてそのバランスをどのように取っていくかが悩ましいところです。
市教委として、学校にとって最も効果的な支援の方法。
支援級在籍の子供が学区外へ入学する場合、どのように「つなぐ」ようにするのでしょうか？
持続可能な取り組みにすること
小中一貫教育が強調され始めると、教科免許を持っていない人はどのような役割が与えられるのか、また小学校内でも高学年が難しいなどの障害が生まれるのではないかと不安です。
小中一貫教育を進めるにあたり、どうしても会議や業務が増えるイメージがなくなりません。自校でも市内の学校でも、働き方改革と同時に一貫教育が推進されていくか不安です。
推進を計画的に進めていくこと
専門に動かしたりできる職員配置が絶対に必要。
担任の先生の疲弊。先生のなりてがいなくならないか。
長い視野で多岐にわたるテーマに取り組んでいくなかで、不登校や発達障害、そのほか配慮を必要とする児童・生徒、保護者へのサポートがどのようにしていくのか、気になる。
保護者の方も仰っていましたが、働き方改革と逆行せずに効果をあげていけるのかということについては不安を感じています。小中一貫に関する業務は時間をかけるべきことだと思いますが、その分どの業務を軽減できるか見直していくことは大変だと思います。

⑥ 本フォーラムに期待すること

アンケートの最後に、本フォーラムに期待することを記述していただいた。その結果、記述してくれた参加者の多くは「学校同士の情報共有の場や、他の分科会の内容の共有（赤字）」「先進事例の紹介（青字）」を主に求めていることがわかった。また、江別市に対して小中一貫が進めやすい校区設定の検討や、保護者へ伝達する機会を求める声もあった。

さらに、このようなフォーラムの再度開催を求める声も複数あり、本フォーラムの意義が認められたと考えることができる。今後、本研究グループで同様の機会を設定するか、市教委が設定していくかは継続して協議していく必要があると考える。

表2 本フォーラムに期待すること

2つの小学校から1つの中学校に進学する場合は、小学校同士の連携が重要になってきますが、どの段階で何をすり合わせてしていくと効果的なのか <b>情報共有できる場</b> があるといいと思います。
2中4小のような特殊な小中連携を進めている <b>先進事例を紹介してほしい</b> と言う事と、これはフォーラムにというよりは、行政に検討してもらわない事になりますが、1中1小や1中と複数小など、小中一貫が進めやすい校区設定を検討してほしいとおもっています。
カリキュラムに関する研修
ぜひ、パワーポイントで <b>ご説明いただいた資料を事後共有したり、他の分科会の資料を同様に共有できたり</b> できると、振り返りができたり、今後の計画推進の参考資料にできると思います。よろしくお願いたします。
ぜひ、小中一貫教育がスタートしてからの <b>全市的な交流</b> をお願いします。当事者になることで、きっとより具体的な悩みや意見が出てくるものと考えます。
それまでの過程を含めた <b>実践例等を知れると良い</b>
ほかの学校の先生たちと <b>小中一貫について悩んでいることを話し合うような場面がある</b> とよいです。
また機会がありましたら、参加させてください。ありがとうございました。
<b>具体的な指導内容</b>
現在第二小中で行われている取組が今後市内に広がっていくので、 <b>各学校での取組について情報発信</b> をしていただけると嬉しいです。
今後も <b>先進な市町村の話題、進め方の具体の講演</b> をお聞きしたいです。
次は教育課程の分科会に参加したいです。
次回も開催していただきたい
自分が <b>参加していない分科会の内容についてもう少し詳しく聞きたい</b> と思いました。
実際に <b>進展されたところの開催で成果を確かめ合えたら有難い</b> と思いました。
実務者同士で <b>情報共有や討論ができる場</b> の提供。
<b>色々な市町村での実践例など</b> 、教職員に対して情報提供いただきたい。
成果を実感させる内容
<b>先進的な取り組み、お話を聞ける機会</b> は貴重で、機会があればまた参加したいと思っています。ありがとうございました。
<b>同じような内容でいいので何回かあると他の分科会に参加できると助かります。</b>
<b>様々な実践事例を紹介して導入のヒントに出来れば良い</b> と思います フォーラムと言う形以外でも構わないので、もっと保護者へ伝達する機会や参加があれば理解がすすむのではないのでしょうか？
また、このようなご示唆をいただける機会をよろしくお願いたします。